

北巨摩地域における黒色土器の様相

大泉村教育委員会 渡邊 泰彦

1. はじめに

北巨摩地域の平安時代の竪穴住居跡より出土する土器群は、須恵器、灰釉陶器の含まれる割合の高さ、ロクロ整形土師器甕⁽¹⁾（以下、ロクロ甕と略す）と北巨摩タイプ⁽²⁾と呼ばれる坏と甕の使用など、国中地域に比べてその特異性が多く指摘されている。そのなかの1つとして、今回の検討対象とした黒色土器も挙げられ、北巨摩地域に集中する分布傾向から、隣接する長野県との密接な関連が考えられてきた。本稿では、北巨摩地域で出土するこれら信州系と呼ばれる黒色土器の集成を行い、そこから導き出される特徴を甲斐型土師器と対比させることによって明確にしていきたい。対象とする地域は、北巨摩郡と韮崎市を加えた10市町村である。

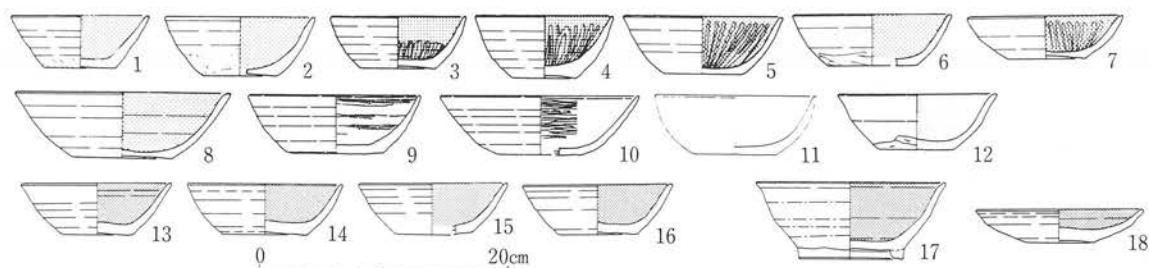
2. 北巨摩地域より出土する黒色土器の特徴

県内の平安時代の黒色土器として最古の出土例と考えられるのは、韮崎市宮ノ前遺跡⁽³⁾のⅢ期（甲斐Ⅵ期）の住居跡より出土したものであるが、その後Ⅵ期（甲斐Ⅷ期）まで出土はない。北巨摩地域全体を見ても甲斐Ⅷ期以前の資料は見当たらないことから、この時期が内黒土器の本格的な普及における初現期とすることができる。その後資料は甲斐Ⅺ期まで増加するが、以後減少に転じ、甲斐Ⅼ期以降に姿を消す。

器種は坏、椀（高台の付くもの）、皿、高台皿、鉢にはほぼ限定され、組成は圧倒的に坏が占める。製作及び調整技法は、全器種に共通して体部外面にロクロ調整痕を残し、底部は回転糸切り未調整のものが主体を占める。内面は底部中央を中心として放射状に、その後口縁部に横方向のヘラミガキを行い黒色処理を施している。ヘラミガキが丁寧に行われているため、内面には光沢がある。しかし、ⅩⅦ～ⅩⅧ期頃になるとヘラミガキが粗雑化し、調整が内面全面に行われないもの、砂っぽく光沢のないものといった製品も出回るようになる。甲斐型土師器の食膳具に比べ、厚手の造り、胎土に砂を多く含むことも指摘でき、特に後者の要因と関連して焼成はやや軟質な印象を受ける。坏について補足すると、わずかながら体部外面の下部に横方向の手持ちヘラケズリ、あるいは回転ヘラケズリ、底部に手持ちヘラケズリを施すものがある。形態は逆台形が基本であり、内面の底部から体部にかけては、緩やかに曲線的に変換する点は共通するが、細部はバラエティに富んでいる⁽⁴⁾。

3. 法量による分類

器種については、高台の無いものを坏、高台の付くものを椀⁽⁵⁾とし、便宜的に器高3cm以下のものを皿、それに高台の付くものを高台皿と呼んで、それぞれを分けることとした。今回集成したのは、編年及び分類案が広く浸透している甲斐型坏・皿に共伴した、口径、器高、底径の分かる資料であり、住居跡出土のものに限った。そのため、甲斐型の食膳具が出土しないか、極端に少ない住居跡の資料については省くことにした。時期区分については、韮崎市宮ノ前遺跡の報告書で示された編年案⁽⁶⁾に則っているが、標記する場合は従来のⅩⅧ期区分⁽⁷⁾を用いているため、甲斐Ⅸ期とⅩ期はⅨ～Ⅹ期としている。



第1図 VIII期の黒色土器 (S=1/6)

VIII期 (第1図)

坏 武川村宮間田遺跡⁽⁸⁾、葦崎市宮ノ前遺跡、須玉町大小久保遺跡⁽⁹⁾より合計16点出土している。口径は10.8~17.0cmの範囲にあり、11cm台のものが4点、12cm台のものが6点出土している。器高は3.3~5.2cmの範囲にあり、4cm台のものが13点を占める。該期の特徴として、器壁の非常に厚いものと体部下端にヘラケズリを施すものの含まれることが挙げられる。ヘラケズリについては甲斐型坏を模倣した印象は受けない。形態は、体部が直線的に開き逆台形を呈するものと、やや内湾気味に立ち上がり、体部外面中位で湾曲するものに分けることができるが、後者が圧倒的に多い。ここには載せていないが大小久保遺跡からは、甲斐型の高台付坏を模倣したと考えられる削り出し高台の黒色土器が多量に出土している。

碗 貼り付け高台の資料が1点、大小久保遺跡1号住(以後大小久保1住と略す・その他同じ)から出土している(17)。口径14.8cm、器高6.1cm、高台径8.1cmを測る。

皿 大小久保1住から甲斐型皿を模倣したと考えられる資料が出土している(18)。口径13.0cm、器高2.6cm、底径5.4cmを測り、底部にヘラケズリを施す。

高台皿は大小久保1住から破片が出土している。

IX~X期 (第2図)

坏 口径は10.8~19.6cmの範囲にあり、11cm台のもの17点、12cm台のもの11点、13cm台のもの11点と集成した坏50点のうち78%を占め、13cm台と14cm台で法量を分けることができそうである。これは器高からも言うことができ、口径10~13cm台の器高が4cm台であるのに対し、14~19cm台のものは5cm台に分かれる。この段階ではヘラケズリを施す資料はほとんど見られない。形態は、体部外面中位で湾曲する形態が主体である。これは前段階でも確認できる傾向だが、本期になってより顕著に認められる。その他、体部中位まで大きく開き、そこから口縁部まではあまり開かない金属製あるいは三彩の碗を模したような形態(26・31・63)、身が深く安定感のある形態(49~51、57~59など)のほか、口縁部を外反させるもの(26~28など)がある。また、宮間田50住からは、大小久保遺跡で出土した削り出し高台を持つ高台付坏(20)が出土している。

碗 本期より出現する(69)。法量の分かる資料は、高台が欠損し不完全ではあるが、宮ノ前191住出土の1点のみである。口径16.0cm、器高4.2cm、底径6.8cmを測り、口縁部が大きく外反する特徴的な形態を示す。

皿 法量の分かる資料は大泉村東原8住出土の1点のみである(70)。口径10.6cm、器高1.9cm、底径3.2cmを測り、体部は直線的に開き、口縁部が外反する形態で、全体的に厚手の作りとなっている。

高台皿 法量の分かる資料は宮ノ前46住、同238住、大小久保4住よりそれぞれ1点ずつ出土している(71~73)。法量は口径12.3~13.6cm、器高2.7~4.1cm、高台径5.7~7.9cmとなっている。宮ノ前例は体部が直線的に開くが、大小久保例は底部が極端に厚く、高い高台が付く点で特異である。



第2図 IX～X期の黒色土器 (S=1/6)

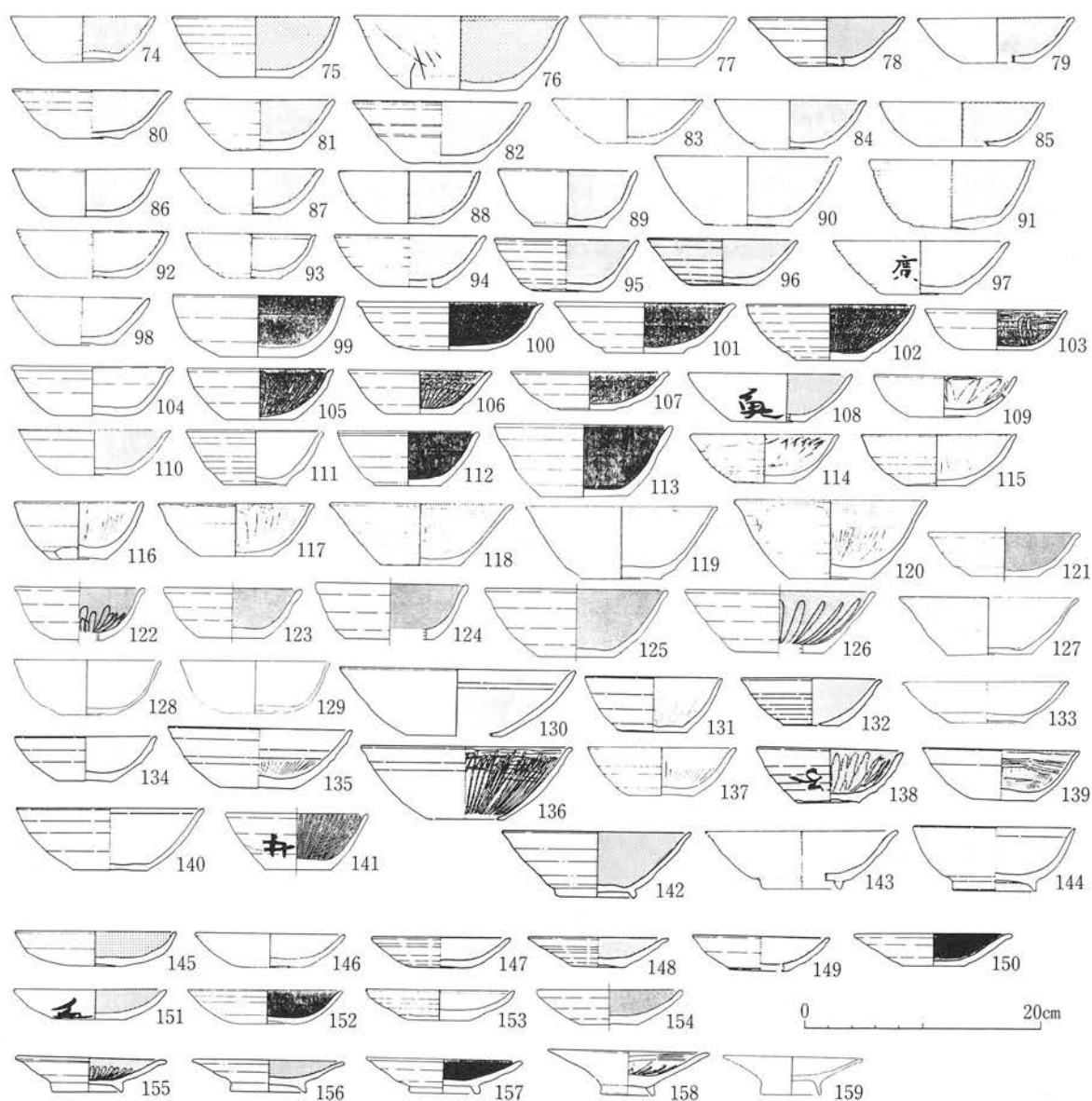
XI期 (第3図)

坏 内黒坏の出土量がピークに達する時期である。口径は10.6～17.8cmの範囲にあり、11cm台のものが8点、12cm台のものが26点、13cm台のものが15点と集成した68点のうち72%を占め、特に口径12cm台のものの多さが特徴である。この段階においても口径11～13cm台と14cm台以降の資料数の差が歴然としている。資料数の差と同様に器高からも前段階と同じく、口径13cm台と14cm台で分けることができそうだが、さらに口径15cm台と16cm台で分かれそうである。前者の器高は5cm台、後者は6cm台を中心に行っている。形態は、体部の中位で湾曲するものが依然として多いが、身が深く緩やかに内湾する碗形態の個体も少量(75・99・122・129など)認められる。また口径15～16cm台の一群には体部に比べて底部が厚く、体部が直線的に開く個体(118～120)が認められる。

碗 法量の分かる資料は3点である(142～144)。口径は14cm台と16cm台に分かれるが、器高は5cm台、高台径は6～7cm台にまとまる。しかし形態は、体部が直線的に開くもの、内湾しながら開くもの、金属製の碗形態のものがあ、口縁部は外反するものとし、さらに高台を付ける位置も底部外縁の内側と底部～体部の境界といったようにバラバラである。

皿 法量の分かる資料は10点である(145～154)。口径11.5～13.4cm、器高2.5～3.0cm、底径4.0～5.8cmの範囲にあり、全体的によくまとまった法量といえよう。形態は、体部が直線的に開き口縁部の外反するものと、内湾しながら開き口縁部の外反しないものの二者に分けることができ、後者のほうが数量的には多い。

高台皿 法量の分かる資料は5点である(155～159)。口径11.7～13.0cm、器高3.2cm、高台径4～6.6cmの範囲にある。形態は、体部が直線的に開く点で共通するが、高台の断面形が三角のもの、四角に近いもの



第3図 XI期の黒色土器 (S=1/6)

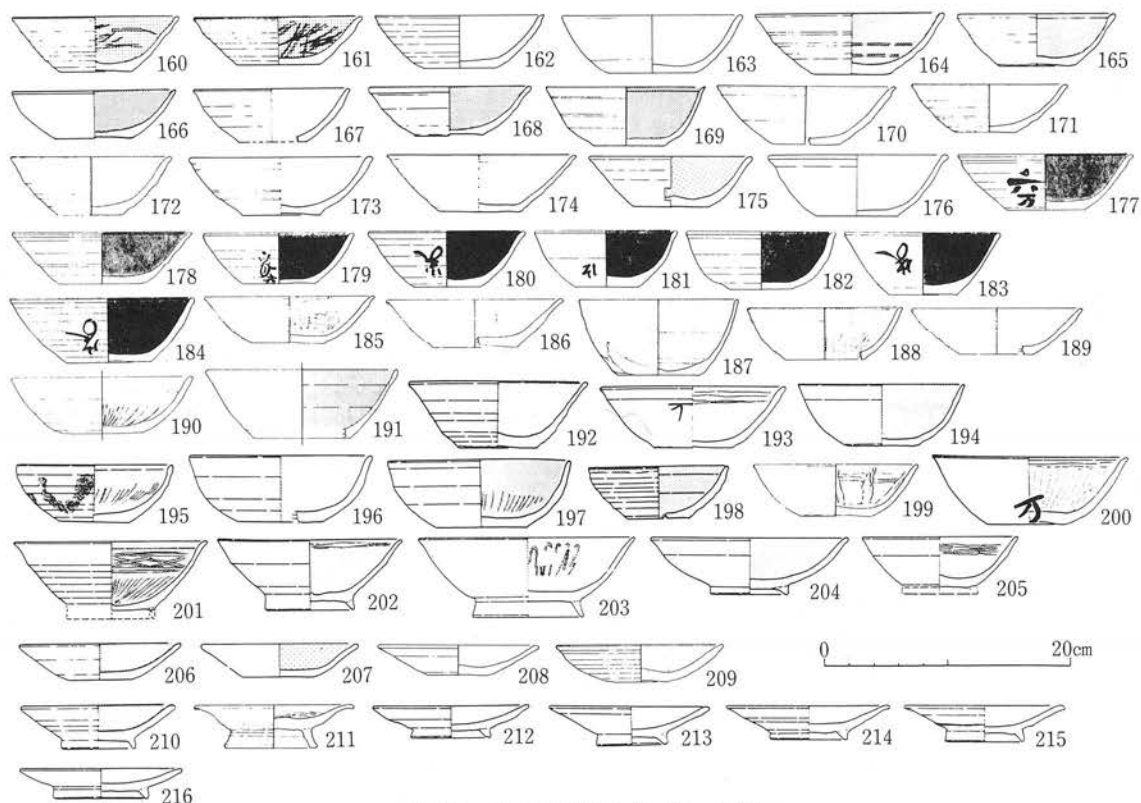
のほか、細く高いものなどバラエティに富む。

XII期 (第4図)

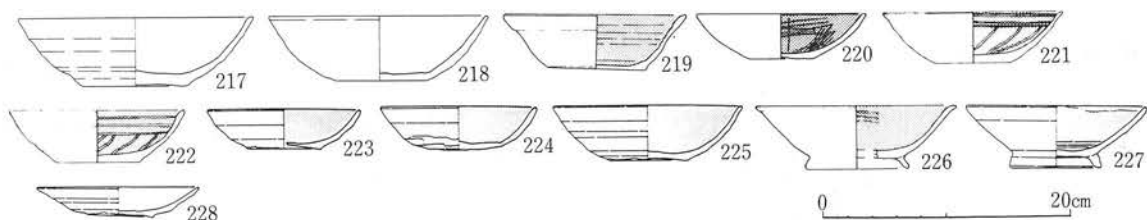
坏 口径は11.0～16.0cmの範囲にあり、11cm台のものが5点、12cm台のものが11点、13cm台のものが10点、14cm台のものが12点となっている。11cm台の減少と14cm台の増加が特徴であり、口径の大型化への指向が見られる。

椀 法量の分かる資料は3点であるが、口径の分かる資料2点を加える(201～205)。口径は12cm台、14～15cm台、20cm台の3つに分けられる。形態は身が深く体部が直線的に開くものと、身が浅く内湾気味に開くものの2つに大きく分けることができる。

皿 法量の分かる資料は4点である(206～209)。口径10.6～13.2cm、器高2.3～3.0cm、底径4.3～5.0cmの範囲にある。形態は体部が直線的に開くもの3点、厚手で内湾気味に立ち上がるもの1点となっている。



第4図 XII期の黒色土器 (S=1/6)



第5図 XIII期の黒色土器 (S=1/6)



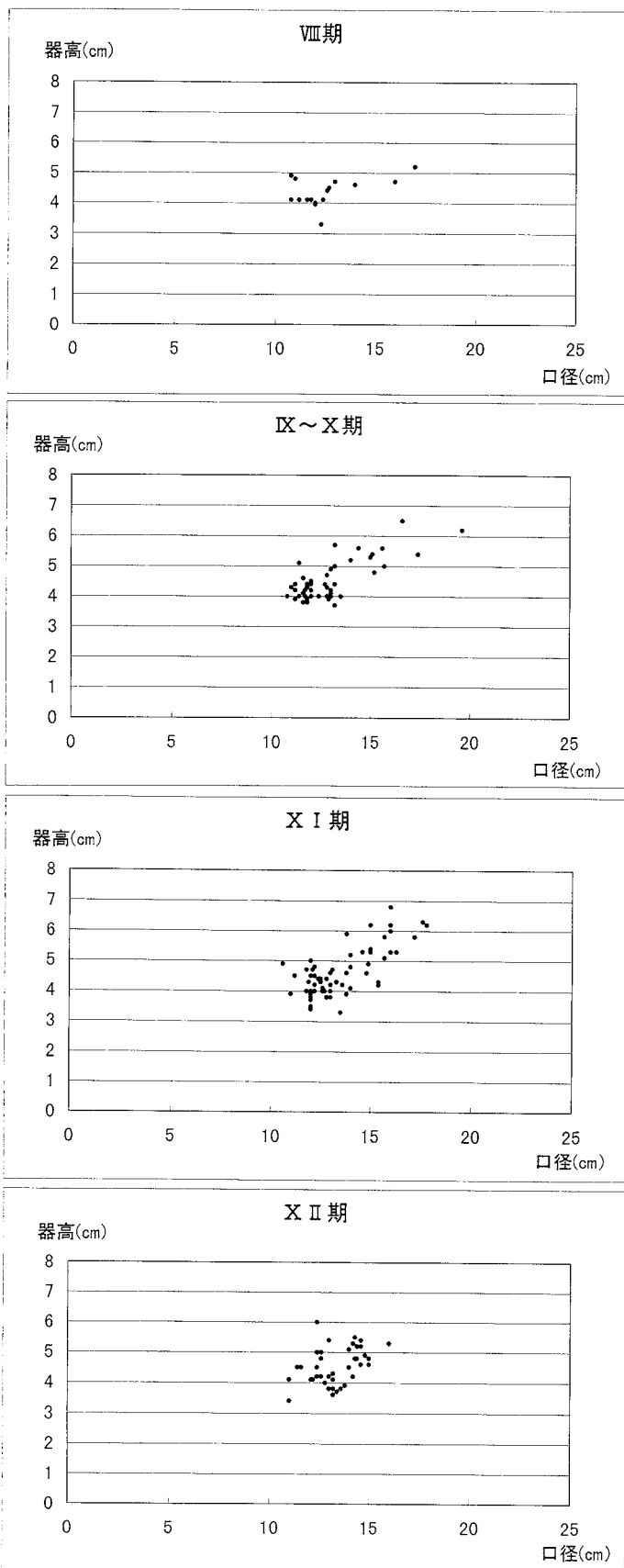
第6図 XIII期以降の黒色土器 (S=1/6)

高台皿 法量の分かる資料は7点であり、4点は宮ノ前34住から出土している(210~216)。口径12.0~13.0cm、器高2.4~3.5cm、高台径5.6~7.5cmの範囲にある。形態は体部が直線的に開くものが多数を占めるが、その中でも内面の底部と体部の境界が若干屈曲するものと、中心から口縁部にかけてほぼ直線的に開くものの2つに分けられる。また、高根町杜口遺跡第3次調査の37住出土資料(211)は、厚手の底~体部、大きく外反する口縁部、高い高台と、IX~X期の大小久保4住出土例とよく似た特徴を持つ。

XIII期 (第5図)

坏 集成した資料は9点と少ないが、法量の中心は前段階と同じく口径13~14cm台にあるようである。

碗 法量の分かる資料は2点である(226・227)。それぞれ口径14.6と15.8cm、器高5.0と5.1cm、高台径7.4と8.0cmの法量で、身の部分は浅く開くタイプである。



第7図 各時期の黒色土器の法量変遷

皿 法量の分かる資料は1点のみ(228)で、口径13.0cm、器高2.4cm、底径5.4cmを測る。

高台皿 法量の分かる資料はない。

XII期以降(第6図)

碗 長坂町健康村20住出土資料が該当する。法量は口径13.8~14.7cm、器高5.4~6.0cm、高台径6.7~6.8cmの範囲にある。形態は、丸みを持って立ち上がるものと逆台形ながら内湾気味に立ち上がるものの2つに分けられる。

皿 口径13.5cm、器高2.2cm、底径5.6cmを測る。形態はXII期の高台皿である社口37住出土例によく似ている。

まず、消費する側である集落遺跡からの出土例をまとめると、坏はVIII期の出現当初から少なくとも2つの法量を備えており、次のIX~X期段階で3法量となる。出土量からは口径11~13cm台の坏が中心であるが、XII期になると口径12~14cm台のものが中心となり、若干大型化の傾向が見られる(第7図)。形態は、体部外面中位で湾曲するものの、直線的に開くもの、全体に丸みを持ったものに大きく分けることができるが、数量的には体部の湾曲するものが多数を占める。その粗型については、前の二者が須恵器坏、後者が金属器あるいは奈良三彩の碗と考えられる⁽¹⁰⁾。

碗および高台皿は、すでに灰釉陶器の模倣から成立した形態であることが指摘されており⁽¹¹⁾、長野県では灰釉陶器の搬入とともに出土するようになる⁽¹²⁾。今回の集成で、その祖型が灰釉陶器と考えられるものは、両者ともIX~X期に登場し、高台皿はXII期まで、碗はXII期以降まで残る結果となった。しかし、高台皿がその出現当初から

完成された形態を有し、ほぼ忠実に模倣していたのに対し、碗は模倣だけでなく、坏に高台を付けただけと考えられるものもあることから、その形態はバリエティに富んでいる。碗の法量は各期を通じて口径14～16cm、器高5cm代、高台径6～7cm台のものがほとんどであり、法量に変化はない。しかし、Ⅻ期では口径12cm台と20cm台の資料も見られ、大中小の法量が認められる。高台皿は口径11～13cm台、器高2～3.5cm、高台径5.5～6.5cmの範囲にほとんどが含まれ、こちらも各期を通じて法量に変化は認められない。形態は直線的に開く低平な皿に断面三角形の高台を付けたものがほとんどで、皿の部分だけを見ると、無高台の皿より低平に作られている印象を受けることから、両者は当初より作り分けられていたと考えられる。

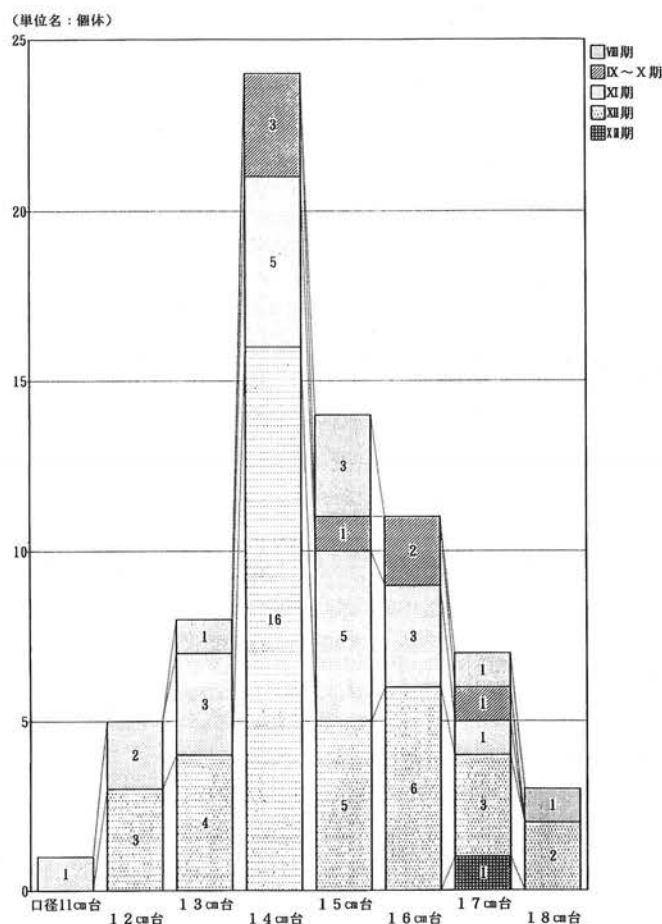
皿はⅨ～Ⅹ期に出現し、Ⅻ期以降まで残る。形態は体部が直線的に開くものと内湾気味に立ち上がるものに大きく分けられ、法量は口径が11～13cm台、器高2～3cm、底径4～5cm台と、まとまった値を示している。各期を通じて法量に変化は認められない。器高については、3cm以下のものを便宜的に皿として分類したことが大きく法量分布に影響したとも考えられるが、3cm台前半の器高を持つ器がほとんど認められないことからこの分類が妥当と考えられる。長野県では坏に比べて後出的な器種で⁽¹³⁾、その消長の時期はほぼ高台皿と重なることから、碗と高台皿のセットの出現による消費者側の要望によって、坏とセット関係となるこの器種の生産が新たに行われたものと考えたい。

次に、生産遺跡である大小久保遺跡⁽¹⁴⁾について見ておく。この遺跡からは信州系と呼ばれる、本稿で扱っている黒色土器のほかに、甲斐型の高台付坏（削り出し高台）と皿を模した黒色土器と坏を模した土師器、ロクロ甕などがⅧ期及びⅨ～Ⅹ期の住居跡から出土している。特に特徴的なのが甲斐型模倣の黒色土器で、この遺跡のほかに確認されるのは高台付坏がⅨ～Ⅹ期の宮間田50住、皿は似たものがⅪ期の宮間田62住にあるのみであり、極めて限定的な流通であったと考えられる。

4. 甲斐型土器との比較

次に圧倒的な流通量である甲斐型の食膳具との比較を行うが、まず甲斐型黒色土器の坏の特徴を簡単に述べておく。形態は普通の甲斐型坏と同じ変遷をたどるが、坏に比べて法量は大きい。黒色処理するに当たってはヘラミガキなどの特別な調整は行わないが、内面の暗文は丁寧に行われる傾向にあり、坏ではⅪ期で消滅する暗文も黒色坏ではⅫ期まで残る。Ⅵ～Ⅻ期までの期間に、全体的に客体的な存在として分布することが分かっている⁽¹⁵⁾。

以下に示すのは、上が宮ノ前遺跡の各期の甲斐型坏・皿の口径の変遷をまとめたもの、下は同時期の北巨摩地域で出土した甲斐型黒色坏の口径分布をまとめたものである。



第1表 甲斐型黒色土器坏の資料数の変遷

宮ノ前遺跡

VIII期	坏は口径10～12cmが中心	皿は口径14～16cm代
IX～X期	口径11～12cm台、13～14cm台、16～17cm台の法量分化	12～13cm代
XI期	口径12cm前後、14cm前後、17cm前後の分布	12cm代
XII期	口径11～12cm代、13～15cm代の分布	12～13cm代

甲斐型黒色坏

VIII期	口径13cm台1点、15cm台3点、17cm台1点、18cm台1点
IX～X期	口径10cm台の内外黒1、14cm台3、15cm台1、16cm台2、17cm台1
XI期	口径11cm台1、12cm台2、13cm台3、14cm台5、15cm台5、16cm台3、17cm台1
XII期	口径12cm台3、13cm台4、14cm台16、15cm台5、16cm台6、17cm台3、18cm台2
XIII期	口径17cm台1

甲斐型土師器においても2つあるいは3つの法量を持つことが知られるが、その出土量からいえば中心は口径10～12cm台にある。信州系黒色坏においても、その中心は口径11～13cm台であり、山梨県内の該期の食膳具のなかでは最も一般的な法量であったといえる。そして、その中心的な法量を「小」として、「中」と「大」に位置する法量が存在する様相は両者に共通する。また、皿が「小」の法量を示す坏とほぼ同じ口径の範囲にあることも共通する。一方、甲斐型の黒色土器の場合は、各期とも普通の坏の法量分化に合わせて幅広い口径の分布を見せているが、その中心は口径13～15cm台であり、従来の指摘どおり普通の坏に比べ大きい作りになっている。また、内面の暗文が遅くまで残るといった要素は、普通の食膳具とは違った意味合いが含まれているといえることができる。しかし、XII期に口径14cm台だけに見られる資料の増加（第1表）は、同じXIII期に信州系黒色坏に口径14cm台の資料が増加したこと、さらに信州系黒色碗が一貫して口径14～16cmの法量を守り、XII期において中心法量を「中」とした3法量が出現するという、黒色土器群に見られる現象は互に関連したことと考えられる。

5. 黒色土器の所有形態

第2表は各遺跡の住居跡の中で黒色土器が多く出土する場合、どのようなセット関係が見られるかをまとめたものである。出土遺物がそのままある特定の時期の所有形態を表しているとは考えていないが、傾向はつかむことができると思われる。ここでは集成に加えなかった、甲斐型土器の出土しない住居の資料と口径の分かる資料も含めて考えたい。口径を10～13cm台を小、14～15cm台を中、16cm以上を大とした。

これらの結果からは、法量の中心を成す「小」の口径の坏が複数出土していても、それより法量の大きい坏は1～2点しか出土しないという例が多いように感じられる。またその場合、必ずしも坏である必要はなく、碗も坏の代用として用いられている印象さえ受ける。つまり、2法量をそろえる事が大切なのであり、灰釉陶器を模して成立した碗を所有することに特別な意味はないように思える。器種組成の中では少量である碗或いは皿、高台皿が、その希少性から経済的な価値を持っていたとは考えられない。それは、ここに挙げた住居跡のほとんどが同時期の住居跡と変わらない大きさであることもその傍証になろう。坏以外の器種には甲斐型土器と灰釉陶器が使用されているのである。

宮ノ前遺跡ではVIII～XIII期まで信州系黒色土器が認められるが、XI～XIII期にかけて甲斐型黒色土器の出土す

第2表 竪穴住居跡より出土する信州系黒色土器の器種組成

遺跡・遺構名	時期	杯			碗			皿	高台皿	図
		小	中	大	小	中	大			
長坂町柳坪南6住	IX～X	8	2	1						図2-31～33
小淵沢町竹原2住	IX～X	5	2							-26～30
明野村屋敷添第2 2住	XI	6	3	1						図3-122～126
武川村宮間田62住	XI	1	1	1				1		-74～76・145
長坂町柳坪 19住	XI	7		1						-83～90
22住	XI	3				1		1		-91～93・146
47住	XI	3						3		-94～96・147～149
同 柳坪南12住	XI	5	5	3				1		-100～102・150
同 境原 3住	XI	3							1	-105～107・157
高根町社口3次6住	XI	2		3						-116～120
24住	XI	2						1		-114・115・153
同 東久保24住	XI	2		1				1		-111～113・152
長坂町柳坪 24住	XII	1	1					1	1	図4-164・206・210
高根町東久保8住	XII	5	1							-179～184
大泉村豆生田第3 10住	XII	5	2							-170～172
長坂町社口3次25住	XII	5	1							-187～189
長坂町柳坪 4住	?	2	3							
27住	?	1	1			1		1		
高根町青木北15住	?	3	1			1			1	
同 東久保5住	?	5		3						
白州町新居道上2住	?	2							1	
大泉村豆生田第3 3住	?	1	2						1	
9住	?	4				1			1	
同 東原 12住	?	5			1					

る住居数が急激に増加する。個々の住居跡から見れば、その出土量は1～数点とごく少量であるが、このような傾向は黒色土器にそれまでとは異なった意味が付されるようになり、当時の人々の生活に新たな習慣が加わった結果と考えられる。具体的にそれが何であるかを示すことはできないが、その場には甲斐型の黒色土器が選ばれたわけである。この傾向はXII期の大泉村寺所遺跡⁽¹⁶⁾でも見られ、遺跡のほぼ中央に占地する掘建柱建物跡を伴う大型の竪穴住居跡はもとより、その他の普通の大きさの住居跡でも認められる。XII期に衰えを見せる信州系の黒色土器群と入れ替わるように増加する甲斐型の黒色土器といい、食膳具に見られる新たな秩序をそのまま持ち込んでいく寺所遺跡の人々といい、XII期という時期は非常に活発に甲斐国の秩序が北巨摩地域に浸透したと考えられる。XI期は甲斐型の皿の外表面調整が、回転ヘラケズリから手持ちヘラケズリに変化する。この変化に対する技術が皿に施されるようになったことは、杯と皿の生産が一元化し、より合理的な生産体制に変化したものと考えられている⁽¹⁷⁾。そして、このXI期に信州系黒色土器の出土量がピークを迎えることも以上の理由に大きく関係しているであろう。保坂康夫氏はロクロ甕の論考⁽¹⁸⁾のなかで、ロクロ甕が遺跡ごとに違った様相を呈することから、巨摩郡司が細かな地域単位に製作者集団を配置したと考えた。

筆者は、大型のロクロ甕がⅧ期に減少し、同じ時期に信州系の黒色土器が普及し始めることから、これらは須恵器の技術的な系譜をもつ同じ集団が生産したものと考えているが、その黒色土器に甲斐型のような画一性が見られないことは、やはり幾つかの製作者集団が生産していたと考えるのが自然である。これら製作者集団は、小さい組織の利点である機動性を活かして、変革期にあった甲斐型土師器の巨摩郡内での流通圏に次々と製品を供給していったものと考えられる。しかし、Ⅷ期において甲斐型土器の新しい生産体制が落ちていくと同時に、前述のように甲斐国の秩序が北巨摩地域にも入ってくる。そのような事態に対し、巨摩郡の黒色土器製作者は甲斐型黒色土器の法量に合わせた坯を生産し、生き残ろうとした結果が、Ⅷ期の口径14cm台の坯の増加という現象につながったと推測される。

おわりに

以上、少ない根拠から論を進めてきた。信州系と呼ばれる黒色土器には、常に長野県との資料の整合が求められる。しかし、山梨、長野両県の編年にはまだ隔たりがある。今年に入り長野県で出土した黒色土器を実見する機会を得たが、ヘラミガキが粗雑化する9世紀中葉以前の黒色土器は北巨摩出土のものと多くの共通点が認められた。形態もバラエティに富む点で共通し、北巨摩出土のものを搬入品か在地で生産されたものか判断することはできなかった。本論では大小久保遺跡の例から在地で生産を前提に論を進めたが、中には搬入されたものがあることは当然考えられる。今後は北巨摩と長野だけではなく、もっと広い視野から分析を進めたい。

末筆ながら、以下の方々には、貴重な御助言と資料の収集、実見に際して多大な御協力を賜った。記して謝意を表したい。また、参考文献については紙面の都合上割愛させていただいた。御了承願いたい。

伊藤公明、佐野 隆、村松佳幸、山下孝司、関間俊明、長野県埋蔵文化財センター 鳥羽英継、原村教育委員会 平出一義、富士見町教育委員会 樋口誠司、小松隆史、佐久市埋蔵文化財センター 出澤 力（敬称略）

註

- (1) 保坂康夫 1988 「山梨県下における古代前半のロクロ整形土師器甕をめぐって」『山梨県考古学協会誌』第2号
- (2) 櫛原功一 1997 「平安時代土器類の分類と編年」『社口遺跡第3次調査報告書』高根町教育委員会 社口遺跡発掘調査団
- (3) 韮崎市教育委員会 1992 『宮ノ前遺跡』
- (4) 原 明芳 1990 「信濃における平安時代の黒色土器」 東国土器研究会
ここに挙げた特徴は、註(2)文献に書かれている長野県での黒色土器の特徴とほぼ共通する。
- (5) 小平和夫 1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—』(財)長野県埋蔵文化財センター
- (6) 註(1)に同じ
- (7) 坂本美夫他 1983 「甲斐地域」 『神奈川考古』第14号 神奈川考古同人会
- (8) 武川村教育委員会 1988 『宮間田遺跡』
- (9) 須玉町教育委員会 1983 『大小久保遺跡』
- (10) 註(2)に同じ

- (11) 註(2)に同じ
- (12) 長野県埋蔵文化財センター 1999 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群』古代1編
- (13) 註(10)に同じ
- (14) 註(7)に同じ
- (15) 甲斐型土器研究グループ 1992 『甲斐型土器―その編年と年代―』
- (16) 山梨県埋蔵文化財センター 1987 『寺所遺跡』
- (17) 瀬田正明 1992 「皿」 『甲斐型土器―その編年と年代―』 甲斐型土器研究グループ
- (18) 註(1)に同じ

挿図出典

- 図1 1・2―武川村宮間田遺跡19住、3・4・5―同64住、6―同68住、7―同71住、8―同72住、9・10―韮崎市宮ノ前59住、11―同207住、12―同302住、13～18―須玉町大小久保1住
- 図2 19～21―武川村宮間田50住、22―同66住、23・24―白州町坂下3住、25―同西之久保3住、26～30―小淵沢町竹原2住、31～33―長坂町柳坪南6住、34・35―大泉村原田3住、36・37―同東原8住、38―高根町社口第3次5住、39―同29住、40～44―同青木北4住、45～47―明野村宮後14住、48・49―同11住、50・51―同屋敷添20住、52・53―韮崎市宮ノ前25住、54―同33住、55―同113住、56～59―同185住、60―同155住、61―同223住、62―同238住、63・64―同292住、65―同宮ノ前第3・6住、66～68―須玉町大小久保4住、69―同191住、70―東原8住、71―宮ノ前46住、72―同238住、73―大小久保4住
- 図3 74～76―武川村宮間田62住、77―白州町所帯II1住、78―小淵沢町前田3住、79―長坂町柳坪17住、80―同31住、81・82―同1住、83～90―同19住、91～93―同22住、94～96―同47住、97・98―同49住、99―同柳坪南5住、100～102―同12住、103・104―同10住、105～107―同境原3住、108・109―大泉村原田2住、110―高根町青木北2住、111～113―同東久保24住、114・115―同社口第3次24住、116～120―同6住、121―明野村下大内3住、122～126―同屋敷添第2・2住、127～129―同北原6住、130―韮崎市宮ノ前4住、131―同31住、132―同153住、133―同250住、134～136―同115住、137―同251住、138―同290住、139―同291住、140―同324住、141―明野村下大内2住、142―小淵沢町前田3住、143―柳坪22住、144―宮ノ前68住、145―宮間田62住、146―柳坪22住、147～149―同47住、150―柳坪南12住、151―原田2住、152―東久保24住、153―社口第3次24住、154―屋敷添第2・1住、155―前田3住、156―前田(1985)7住、157―境原3住、158―東原2住、159―北原6住
- 図4 160・161―武川村宮間田54住、162―白州町雑木2住、163―同新居道上、164―長坂町柳坪24住、165―同39住、166・167―大泉村寺所4住、168―同13住、169―同14・15住、170～172―同豆生田第3・10住、173・174―同天神10住、175―同東原6住、176―長坂町健康村21住、177・178―高根町東久保6住、179～184―同8住、185・186―同1住、187～189―同社口第3次25住、190―明野村屋敷添3住、191―同12住、192・193―韮崎市宮ノ前34住、194―同38住、195～197―同189住、198―同284住、199―高根町社口第3次37住、200―宮ノ前36住、201―同34住、202―同63住、203―同69住、204―同119住、205―同177住、206―柳坪24住、207―東原11住、208―東久保8住、209―同11住、210―柳坪24住、211―社口第3次37住、212～216―宮ノ前34住
- 図5 217・218―長坂町健康村15住、219―大泉村城下14住、220―同20住、221・222―同木ノ下・大坪1住、223～225―韮崎市宮ノ前11住、226―城下6住、227・228―宮ノ前11住、
- 図6 229～232―長坂町健康村20住